

白百合の髪飾

私たちの王女さまへ

「ごきげんよう、アルテミシア。」

「ごきげんよう、ヴェルディアナ。」

彼女はいつも凜としたすまし顔で宮中を歩いていた。私はそんな彼女の事が苦手だった。我が国の第一王女、ヴェルディアナ・スカララティーナ。王位を継ぐことが定められていた彼女は、いつだって王位継承者にふさわしい気品を備えている。それを崩した姿を、私は見たことがない。

「アルテミシア、少し顔色が悪いようね。大丈夫？」

「ええ、平気よ、ご心配ありません。」

彼女はいつだってツンとしているのに、こうやって気遣いもできる。そんな彼女のことが、やっぱりどうしても苦手だ。彼女はあまりにも完璧すぎる。王女として、そしていざれ就くことになる、女王という存在として。女としてだって完璧だ。艶めかしい黒髪に、白雪のような肌。びっしり生えて目を縁取るまつ毛も黒々として長く、その金色の瞳はいつだって理知的な光を宿している。形の良い唇に、凜とした美しい声。まさしく王女として生きるために生まれたような存在。大して私は、そばかすだけの顔に、別段きれいでもない栗色の髪。肌だって白いいえ白いけれどヴェルディアナには劣るし、唇の色も形も決して美しいとは言えない。それでも、偶然にも母が王様に見初められたおかげで第二王女という席につくことができている。

私もヴェルディアナのようになりたかった。王女としてふさわしすぎるその姿を見るたびに、眩しさと、羨ましさと、妬ましさを感じてしまう。そんな自分に嫌気がさす。

そんな彼女がある日、別荘へと旅立ったと聞いた。理由は「病気療養」だとか。彼女が病気だなんて知らなかった。もしかしたら、嘘なのかもしれない。例えば婚約者と密会しているとか。……なんて、第一王女様ともあろう方がそんなことをしないか。

彼女のいない宮殿は、とても穏やかだった。いつもは張り詰めている世話係たちも、どことなく力を抜い

ているように見える。それはとても良いことだと思うけれど、同時に、やっぱり私は王女らしい気品だったり、ある種の厳しさだったり、そういったものがないんだという悲しさも感じる。

彼女がいなくなっただけからというものの、確かに宮中は穏やかなのだけれど、どこか寂しさと色あせた感じがあった。改めて、彼女はこの宮殿にあるべき存在なのだと思ひ知る。私がいなくなっても、こんな空気にはならないだろう。適度な緊張感と華やかさ、それを彼女はもたらしていたのだ。

数日後。彼女が死んだと報せが届いた。

私は泣いた。彼女がいなくなっただけで嬉しいはずなのに、泣いた。宮中の誰もが泣いていた。死んだ理由は伏せられていた。葬式は静かにしめやかに執り行われ、彼女の亡骸を見ることは許されなかった。

その日から、宮中からは色が消え去ってしまったような気がする。第二王女である私に王位継承権はうつり、その儀式も行われたけれど、ヴェルディアナを失った空白を、私にはやはり埋めることができなかった。彼女はあまりにも王女だったのだと改めて思い知る。王位継承者として、王女として、いつだって気を張っていた彼女。彼女の苦悩を、いま、私は気づく。この重荷は、背負ったものにはかからない。

彼女は逝くときも王女だったのだろうか。それとも一人の女として逝けたのだろうか。私には分からないけれど、どうか、死の間際だけは、ただの女であったことを願おうと思う。

ヴェルディアナ・スカララティーナ。私たちの王女様。どうか天では、たった一人の女であれますように。もう、その肩から、重たいものが外れていますように。

あなたの苦しみに、気づけなくてごめんなさい。